

おはなし散歩道

太りすぎた代官

八王子市 池田 美絵

ある城下の代官は、献上された京の菓子を食べて以来、甘いお菓子のとりこになっていた。砂糖が貴重品だったころのお話だ。お菓子の食べすぎで、まるまると太っていた代官は、歩くことさえも難儀になっていた。

ならば、かごで出かけようとしますが、あまりの重量に家来が根を上げてしまい、代官は屋敷に引き返す。奥方は、そんな代官を見かねて再三にわたって食べすぎを注意するのだが、代官は腹を立て、とうとう奥方を里に帰してしまいました。

ある日、代官屋敷に南蛮渡来の菓子を献上したという男が現れた。ほかおむりをして何やら、怪しげな男だった。だが、菓子と聞いて、代官は怪

しげな男を屋敷の中に招き入れてしまった。

「ハアハア、そのうまいものや、さっそく見せてみる」

代官は太りすぎて、話すこともつらそうだった。男は、うやうやしく包みを差し出すと、こう言った。

「南蛮の商人から、特別に手に入れたまんじゅうでございます。お代官様にぜひ、召し上がっていただきたくてお持ちしました。でも、一度にたくさん食べてはいけませんよ。なぜなら……」

「能書きはいいから、早くその包みをよこせ」代官はじれて男から包みをひたたくと、奥の間へひっこんだ。男は、にやりとして屋敷を後にした。

さっそくまんじゅうをほおぼると、代官は蜜のような甘美な風味に魅せられた。気がつくやうに、気が十個もたいらげられていた。

「うまいのう。ハアハア。なんだか楽しい気分になつてきたのう」

なんと、代官の体が勝手に踊りだすではないか。

「まあ、なにをされているのですか。屋敷の者が驚いて聞く

と、

「ハアハア、わしは、踊りたいわけではなくて、ハアハア、体が勝手に動くのだ。フウフウ」

汗は吹き出し、息は絶え絶えでも、代官の踊りはやまなかった。夜が更け、朝が来て、ついに代官は気が付いた。

「あの男、まんじゅうになにかしこみおつたな！」だが、そのあとも代官は踊りつづけた。十日も



過ぎると、城下の人びとのうわさ話にのぼることとなった。「そろそろ、効果が出てきたころね」

代官の奥方は、にやりとした。じつは、ほおかわりの男は、奥方が差し

向けた里の男だった。奥方は、最近の代官の墮落ぶりに業を煮やしていた。上に立つものが怠ければ、害をこうむるのは民だ。それを心配していた。代官に献上したまんじゅうは、南蛮渡来ではなく、甲州の山奥から採ってきた踊りきのこを練りこん

だものだったのだ。そんな奥方の思惑に気がつかず、ひたすら踊り続ける代官にも、良いことがあった。だんだん体が軽くなってきたのだ。以前の代官の風貌が現れてきた。

「あら、代官さまはいい男ですね」

屋敷の者は、驚きの声を上げた。そう言われ、代官はまんざらでもない様子で語った。「最近のわしは、食ってばかりで自分の役目を忘れておったわ。軽くなった体でまた、城下を見て回ろう。それにしても妻には悪いことをしてしまつたなあ。まずは、呼び戻してあやまりたい」

色なき風

シャンソン歌手 友納あけみ

月日は駆け足で過ぎて行きます。

秋風は「色なき風が吹いてきました」と表現するそうです。

この「色なき風」、秋らしい真つ青な空一面に、魚の鱗のように小さな薄

綿雲が広がり、いつのまにか夕暮れが早まり、朝晩の冷えこみを感じさせる透明な風、何となく心細いような人恋しさ……

いろいろな想いを、そのまま表してくれているように、素敵な言葉です。

日本語は本当に素敵だ、この四季に恵まれたこの国に生まれたこと、そして、この風土と文化の中で生きられる幸せを、しみじみと感じさせられます。



大山御貴首へご挨拶に訪れた友納さん

皆様に支えて頂き、今年もコンサートの「恋文V」を終えることができました。今回は堀達雄の「風たちぬ」を歌と語りで綴ってみました。文豪の名作は、なかなか手強

く、脚本を何回も書き直し、書き直し、最後にやっと自分なりに納得のいくものになった時、初めて、この小説を書いた作者の思いへの、色々な謎も解けていき、歌を創っていくのは、また、違った意味での深い充実感を感じられました。

でも、それが皆様に果たして伝わるかが……？

本当に凄く不安のまま当日を迎えました。スタツフの皆様、ミュージシャンの仲間達に支えられ、ドキドキ、ハラハラの幕開け。

その分、お帰りにロビーで御挨拶をしながらの皆様温かいお言葉……後から頂いた沢山のメール一つ一つが、大きな幸せを運んで来てくれました。

心から感謝申し上げます。コンサート「恋文」はまだまだ歩き始めたばかりのシリーズです。

この中に私自身が生きてきた事、語ってきた事、歌ってきた事、そのすべてに答えるような気がします。

来年も十月十六日(火)に新橋・内幸町ホールで予定しております。

お問合せ TEL: FAX

〇三三五三三九五〇七 MAIL

fwky6495 @nifty.com

高尾山の昆虫

タカオメダカカミキリ

98



高尾山に棲む昆虫は五千種に及ぶと言われ、さすが日本三大昆虫生息地の一つに数えられるだけのことはあります。その中には高尾を冠する和名が付く種もいて、今回取り上げましたタカオメダカカミキリもその一つです。

本種は四〜五mmほどの小型種ですので、一般人々は勿論のこと、虫に興味がある人でも見つけることは簡単ではありません。

高尾山は標高六百m弱の山ですが、イヌブナが多くブナも所々に生育していて、ブナの周辺に落ちていた小枝を持ち帰って管理していると、羽化脱出することが知られています。

それではちよつと味気ないと思う場合は、早春に現地で落ちていた枝を丁寧に割ってみると褐色の小さな本種が中から見つかります。

ただ、想像以上に小さいため、木のシミと思つて気がつかないかも知れません。

高尾の名が付いていますが高尾特産種ではなく、初めて記録されたのが高尾だったということであり、極めて小さく地味なマニアックな種でありながら、高尾の虫を語る上で欠かせない存在だと思

(撮影・文松島 孝)